着任のごあいさつ

林産試験場長　鈴木道和

4月1日付け人事異動により，森林研究本部次長兼林産試験場長となりました。よろしくお願い申し上げます。

旭川での勤務は，昭和63年4月から平成5年3月まで，当時の上川支庁林務課林産係にいたとき以来ですので，27年ぶりとなります。当時，林産試験場は市内緑町から同西神楽への移転が完了（昭和61年）していましたが，それでもたくさんの視察者が連日のように訪れており，上川支庁の庁舎も市内中心部にありましたので，私自身，視察者を旭川駅から試験場へと公用車で送り，場内の視察に何度も同行していました。大きな試験棟，そして，多くの機械や装置に驚かされた記憶が残っています。その後，札幌をはじめ，帯広を2回，函館と，ほぼ林務行政に携わり，今回，道水産林務部森林環境局長兼全国育樹祭推進室長から，試験研究機関への初めての異動となりました。

前回の旭川勤務から，30年近くが経とうとしています。時代の流れとともに，道内の林業・木材産業は大きく変わりました。製材工場も700工場から，現在は170弱となり，また，活用される森林資源も，天然林から人工林が中心となり，住宅をはじめとする建築物にあっても，様々な資材，様々な構法で建設されるようになりました。そして，社会経済はデジタル化が急速に進み，行政においても試験研究機関においても，IT，ICT，IoT，AI，VRなどの技術をどう活用して，ニーズに対応していくのかが求められていますし，何よりもそうした時代の速い流れに遅れをとらないよう，しっかりと意識しながら行政や試験研究を進めていかなければならない情勢にあると思います。

ここ数年，私が仕事をする際，大切にしている言葉があります。「役に立つ」です。この言葉は，「無印良品」を展開する株式会社良品計画が「大戦略」として，経営の一番上に据えている言葉です。パクリですが，ちょっとアレンジするならば，「地域の役に立つ」という想いです。

「本道では，全国を上回るスピードで少子・高齢化が進んでいる」というフレーズをよく耳にします。道内では人口3千人から4千人の町村が多いのですが，これらの町では，毎年100人程度，人口が減少しています。つまり，十数年で町の人口が半減するわけです。こうした町では，疲弊化していくことを少しでも食い止めるため，地域の豊富な人工林資源を活用して，まちづくりを進めていくことを考えています。

「役に立つ」は，役所の仕事として本来目的です。しかしながら，技術の進歩が速く，社会経済が大きく変化している中で，過去に囚われたやり方では現在の地域の課題解決にはなりえないということをきちんと認識して対応していかなければ，「役に立つ」は実現できないと思います。疲弊する地域やそこに住む人たちの日々の暮らしに対し，林産試験場としてもどう向き合うのか。森林というツールを活かして役に立つことはできないだろうか。そんなことを思いながら，試験研究や成果の普及に努めていきたいと考えています。さらには，時代に即し，スピード感ある対応をしていくためには，我々試験研究機関だけで対応するのではなく，民間企業，それも林業・木材業界だけではなく，幅広く異業種の方々とコラボしていくことが必要です。国連の持続的開発目標（SDGs）や，投資基準としての環境配慮・社会貢献・事業体統治（ESG）の視点を取り入れた企業活動が標準化されつつあり，森林資源の循環利用に向けた試験研究活動にとっても追い風です。私自身の様々な人・企業とのつながりも活用しながら，業務に当たっていきたいと思います。

この原稿を書いている今，新型コロナウイルスの感染拡大を受け，緊急事態宣言が出されています。試験研究活動にも支障が生じている状況にありますが，1日でも早く終息し，そして普段どおりの社会・経済へと戻ることを願うばかりです。ただ，終息後は，企業活動や働き方，そして人々のライフスタイルは大きく変わるでしょう。そこに生まれる新たな試験研究ニーズにも対応し，我々としてどう役に立つことができるのかということも考えておく必要がありそうです。

森林・林業・木材産業に携わる方々をはじめあらゆる企業の方々，市町村やNPOなどの団体の方々，そして道民の方々などなど，皆さまの経済活動や暮らしに，林産試験場として「役に立つ」を進めていきたいと考えておりますので，これまで以上にご支援，ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。